

モード Mode Mode は語る

中野 香織

海外から見る「日本らしさ」には、ミニマルな美が挙がることが多い。シンプルで機能に徹した表象や余白に、禅の精神性が読み込まれることも目立つ。

一方、日本には豊饒（ほうじょう）な装飾の伝統もある。多色使いが特徴でもある着物の世界に顕著に見られる。とりわけ花嫁衣装である打ち掛けには、過剰とも思えるほどぎっしりと意味と技巧がこめられる。

6月に東京・銀座のポーラミュージアムアネックスで開催されていた展覧会「絵を纏（まと）う」では、みごとな打ち掛け13点を観賞できた。ファッションディレクターの岩槻せつ子さん（75）が

技術途絶える恐れ

日本の美、打ち掛けの豊穡

集めた500点から厳選された13点である。

糸、織り、染色、刺しゅう、意匠、そして裏側にいたるまで、間近で見られるよう工夫されていた。金銀プラチナの糸、数人の職人が5年かけて完成させた立体的な刺しゅう、今にも飛び立ちそうな鶴や孔雀（くじゃく）の意匠、光と色彩の洪水に目も心も覚醒する思いがした。

花嫁が四季すべてにおいて幸せであるようにと願をこめて百花が描き込まれる打ち掛けなど、ミニマリズムの対極にある。嫁ぐ娘への思いや婚家の未来の幸福への願いが凝縮された打ち掛けは、発するエネルギーも強く大きい。日本人の情は濃くて熱かったことが伝わる。



相良刺しゅうが施された打ち掛け「百花絵巻」

岩槻さんが収集し始めたきっかけは、バブル崩壊である。高価な打ち掛けを着る花嫁がいなくなり、値段不問で作られた豪華な打ち掛けが美術品として海外へ売られ始めた。海外に散逸し、伝統技術が途絶えることを危惧して個人で収集を始めた。高齢になり500点の維持管理も困難になりかけてきたので、岩槻さんは打ち掛けの未来を案じている。

刺しゅう針を作る職人もいなくなり、時間はあまりない。途絶えると復活が困難な伝統技術。散逸すれば忘れ去られていく意味まみれの意匠。そこに託された日本人のこまやかな感性や豊かな感情を受け取り、未来に伝えていくことは、私たちの義務ではないかと思わせる力をこの豊饒な美は備えている。500点の打ち掛けの嫁ぎ先、みんなで考えませんか？

（服飾史家）